

# 『鉄鎖を碎け』NO.1(72年10月掲載)

## (1) 反スターリン主義の克服

①「一九五八年一二月ブントの結成をもつて実践的に開始された日本新左翼運動は、現在、決定的な飛躍を要求されている。」

それは、その誕生の条件に規定づけられて歴史的限界として持たざるを得なかつた、組織活動上の、また国防主義の、あるいは権力問題に於ける、反スターリン主義的、トロツキズム的限界を全面的に、全領域に於いて止揚し、その成果を党建設として結実させ、その事を通した日本プロレタリアートの武装蜂起へむけた準備を現実的に開始しなければならない。

とりわけ、我が同盟にとつては、連合赤軍問題として一つの極限をきわめた事態は、決して他事ではあり得ない。

反スターリン主義の克服は69年を境とする軍事問題と密接に結びついて提起された。何故なら、反スターリン主義は56年の20回大会による公然たる日和見主義(平和共存・平和移行・全人民国家)としてのフルシチヨフの登場と、日本では50年代武闘の敗北による六全協という条件の中で、その中から生み出されたものであり、従つて、そのような合法主義の遺産は、それを批判した新左翼運動にも負の遺産として引きつがれ、結局は合法運動の最左翼としてあり、それを根底的にくつがえすものであり得なかつた。その克服は、65年ベトナム人民を中心とする民族解放闘争に援けられ、一〇・八以降の実力闘争として萌芽的に開始され、69年の段階で、その克服が決定的な問題となつた。このようく合法主義は從来の運動の根本的問題であり、新左翼運動も無縁ではあり得ず、この克服が本格的革命闘争と革命党建設にとって根本的問題だという事である。だが同時にこの合法主義が、軍事問題の登場によつて実践的に提起されたという事が、決定的に教訓化されなければならないのだ。

資本主義への原則的批判は、決して一般的にあるのではない。赤軍派の多くの諸君の主張を見る時、レーニンが、一九一九年のボリシェヴィキ綱領改訂にあたつて、何故に、ブハーリンの如く帝国主義批判からはじめるのではなく、資本主義の批判からはじめ、その上にたつて帝国主義批判を行つたという事が、関連している。

レーニン全国政治新聞、現在は軍事組織レーニンの時代、政治闘争、現在、武装闘争といった主張は、そもそも、レーニンが、ボリシェヴィキを、政治警察と闘い、正規の包囲軍として、うちきたえ、あるいは、日常的なソアーリ政府との武装闘争を行はんといた事への決定的過少評価におちいるものである。反スターリン主義は民族解放闘争、中共の評価の中では誤りを露呈した。第一次ブントも、最も国際主義の立場に立脚していたとはい、それでも反帝第三潮流論として、現実の展開されている運動に立脚する以上ではなかつた。

12・18路線は、このようなベトナム民解開放闘争を中心とした世界的な階級闘争の昂揚とそれを荷つてゐる中共、自主独立左派(北ベトナム、北朝鮮、キューバ)や、先進国革命左派との一般的結合を主張した第二次ブントに対し、スターリン批判を明確にする事を通じて、これらの諸革命派に対する党的評議を確立する事を通じて、これらは、その組織の中に継承されるといふ事は、あり得ること

八木沢 二郎

要性と、にもかかわらず、軍事問題に局限されるべき問題ではなく、組織活動全体の合法主義の克服として考えるのが赤軍との党内闘争以来の一貫した我々の立場である。

第一次ブントにあつては、その組織が全学連フラクを横流しつつも、実質には、全学連フラク的組織としてしかあり得なかつた。第2次ブントは、65年以降の反戦青年委員会運動の中で、中央集権党一地区党路線を提起して、大きな組織的前進を勝取つた。だが、この場合も、実体として党の独自の陣型を持つといふより反戦青年委員会に依拠した地区党であつたというだけにとどまらず、「反帝統一戦線と階級的労働運動」が、その水準を示してゐるようだ。反帝統一戦線内のヘゲモニーとして党組織があつたのである。

更に、69年安保決起をめざしての、軍事問題の提起は、ドブ理論に依拠し、また過渡期世界論によつて論理付けられた。

レーニン主義からのイツ脱を生み出した。例えは、赤軍派については、高次の自然発生性、軍建設から党建設という形で、あらさまにもレーニンの「限界」なるものが主張されたし、12・18戦線下の我が同盟にあつても、全国政治新聞に對置するよ

うな形で、非合法組織の環としての軍事組織が主張されたのである。

総じて、ブントのこのような組織問題は、その思想的根拠を深く持つてゐる。つまり党の立脚点を、結局、現にある運動の中を求め、その運動の中の最左派のヘゲモニーとして党を考える事であり、2・18路線の最大の成果は、党の立脚点を、ひのうな階級闘争を生み出すにはおかない資本主義の原則的批判に求めた事である。

だが、現時点での国際的な諸党派への評価は、このスターリン主義批判をふまえながらも、そこから直接的に導き出すことはできない。何故なら、現実の諸党派の分化は、このスターリン主義での生み出されたものだからである。ペスター・ブハーリンは、(1)共産主義論での生産力理論(2)連邦主義(3)社会主義論(4)各國革命の類型化による一国主義革命路線を主な内容としている。

スターリン主義は、生産力論、一国社会主義論によつてソヴィエトシアの防衛を国際共産主義の第一の任務として設定し、各国共産党的方針を、このもとに従属化せしめた。だが、当時のロシアの帝国主義の包囲にさらされてゐるという条件のもとでは、この防衛自体が、各國での帝国主義に対する確固たる闘争が要求された。だが、コミニテルン7回大会反ファシズム統一戦線論以降、帝国主義を二つの陣営にわけ、一方の側に加担し、各国でもブルジョアジーとの連合戦線を形成し、それが世界的体系となる事によつてスターリン主義は社会帝国主義への転化を開始したのであり、それは、ソ共産党20回大会のフルシチヨフ路線(平和移行、平和共存、全人民国家論)によつて完了した。

各国共産党を評価する場合、このスターリン主義の社会帝国主義への転化の中で、どのような位置を占め、どのように対応したかを明らかにする事が不可欠の条件である。スターリン主義の理論的影響下にあっても、社会帝国主義と異なる革命的実践を展開する場合も、また少なくとも、その国の人民の革命的伝統は、その組織の中に継承されるといふ事は、あり得ることである。日本共産党は、6全協とソ共産党20回大会を契機とし

て社会帝国主義に転化したのである。それ以前の共産党は、スターリン主義によつて、いくたの根本的あやまりを犯した。にもかかわらず、日本プロ・人民の革命的伝統が、この組織の中に継承されたこともまれもない事実であり、我々自身の誕生自体が、最終的に、この革命的伝統を失て去つた社帝へ転化に対する批判を通じて、その革命的伝統を継承したのである。

中国共産党は、遵义会議以降毛沢東の指導下にあり、コミニテルン回大会の路線にもとづいて抗日統一戦線 第二次国共合作を開いた。だが、その場合、ブルジョアジーに妥協せず軍の独自性を確保した。それをなし得たのは、中国社会階級の分析であり、また、中国革命の世界革命上の位置と性格し（「新民主主義論」）を明確にし、更に、それを農村根拠地へ紅軍として、独自の組織的陣型へ具体化した事である。ここに、7回大会路線にもとづいた実践でありながら、実質的には、それと異なるものとして社会帝国主義との分化を現実的に開始したのである。

スターリン主義の社会帝国主義への転化の完了した20回大会以降、中共の社会帝国主義からの公然たる分裂が中ソ論争として開始され、とりわけ、文化大革命を行う事によっていまだ、(ア) 周辺革命論－人民民主主義革命論といつて、その限界を有しつつ修正主義規定を社帝規定にまで深化させ、過渡期の階級闘争の存続を一層明確にして実權派を放逐し世界革命の大後方となつたのである。

(イ) プロ独立社会主義 (口) 周辺革命論－人民民主主義革命論といつて、それは第三潮流論に論拠をもつ) によってなされるというものでなく、最大の核心は中共との党派闘争（といふことは統一戦線を前提としている）にあり、そのためには、日本での单一党の建設、確固たる党形成を前提とするものである。文字通りの世界党的形成は長期のものではあるといえ、党は、断乎たる国

際主義に貫抜かれていかなければならぬ。我々の過去は、第一次ブンド世界革命論の原則宣言的抽象性、第二次ブンドは、ベトナム階級闘争を先頭とする国際階級闘争の中での下からのこの運動との同質性の確立の必要性として（世界党－赤軍－統一戦線論の、無党派性）提起され、先にも述べた如く、それを指導している党派への評価の基準が明確ではなく、國際主義がすぐれて党の結合として提起されず、運動一般の結合になり、各國際階級闘争の共通性が抽出され、世界革命の具体的姿が不明確になり、又、日本革命の性格（日帝の國際権力要素とその特殊な位置に規定された）が、一般性に流しまれていった。この極限的表現が、赤軍派の武装ブルタリアート→根拠地論であった。更にかかる傾向を批判した12・18路線も、結局、國際非合法党－反革命軍事体系論として実体化され、國際階級闘争の傾向性の中に、日本革命の戦略問題がとかしこまれた。現在、我々にとって、党的飛躍の環をなしてゐるのは、國際主義的立場の上にたって、そして日本革命の戦略問題として、解明することであり、その事によって、コスマボリタン的傾向を克服し、又我々の活動の抽象性を克服する事ができる。

(2) 戰略問題での諸偏向と12・18路線の繼承  
① このような日本革命闘争の戦略問題へ意識的、無意識的に接近しているのは、赤軍派の諸君と中核派である。そして、その中に、典型的な偏向を見る事が出来る。（革マル、宮下派は問題意識さえない）中核派については、これまでたびたびふれてきたが、要約すれば、(ア) 先進国主義の自己批判として、民族解放闘争との結合を提起しつつ反スターリニズムによる運動との結合として党派的には、全く不徹底な立場であり、一国际主義ならざるえない。

(口) 先進国主義の自己批判は、直接的には、民族解放闘争との関連で提起されたが理の当然として、それは日本ブルタリア

ーの民族問題を軸とした自己批判からブルタリア内部の差別、分断支配を問題にし、特殊に差別、分断されている層への自己批判運動へと発展した。(ハ) それは能動的には責務論として發展し、更にいわば、戦略論的に暴動論から蜂起の準備へといたっている。

(二) これらの根拠は黒寛の人間主義及び反スターリニズムである。赤軍派については、その代表的主張としての花園論文（序章6号）をとりあげてみると、一般的にはブルタリア革命は民主主義革命でなければならない。(口) そしてその民主主義闘争の主要な内容として反米愛国闘争が位置づけられるべきである。これらの中核派、赤軍派の最近の主張は、6年以降の階級闘争の転換と、その中で要求されている第一次ブント以来の革命党の転換、飛躍へ接近せんとしている意味では、共通しながら、前者は反スターリニズムの枠の中で、後者は毛沢東主義を教条的に日本革命の戦略問題に持ち込むことでそれをなそりとしている。

この事は国際主義の立場と戦略内容の密接不可分性、国際主義の立場が戦略方向を規定づける事を示している。中核派の如く民族解放闘争との結合を云いつつそれを指導している党をスターリニズムとして切りてるならば、結合すべき対象はいはず、必然的に侵略を内乱への一国主義路線にならざるを得ない。あるいは赤軍派のように毛沢東主義を教条的に持ち込むならば、それが周辺革命論－反米闘争－ゲリラの道か、周辺革命－反米闘争－買弁ブル追いつめの改良主義かのいずれかとしてしか結果せず（それは決して毛沢東主義ではない）問題は国際主義における無党派性の克服をどのようにして行なつていくのかと云う問題である。

(B) 最大限の綱領－最小限の綱領、過渡的綱領  
我々は民主主義、社会主義革命論や、人民民主主義革命論への屈服が実は從来の新左翼運動の革命論の克服を意図しつつ、結局足をすくわれたものであると見てきたが、そのためには從来の革命論をどう克服するかを明らかにしなければならない。

12・18路線は宇野、黒寛の批判を通じつて (ア) 資本主義の原則的批判とブルタリアートの措定、共産主義を明らかにし、(口) コータ綱領批判の立場を継承しつつスターリン・ブルタリアーとしてスターリン主義、社会帝国主義の批判を行ない、(ハ) 単一共和制としての世界ブルタリア独裁を明確にした。

ここに抽象的ではあれ、戦略問題を提起する立場は明日であり蜂起－臨時革命政府樹立－世界革命戦争－世界ブルタリアーとして戦略的基本を指定する立場は明らかである。

そしてこの基本的立場を現実の階級闘争、党派闘争の中で物質化されねばならない。

(3) レーニン綱領の継承  
(A) 革命戦略を考察する時、その綱領の位置をまず明らかにしておかねばならない。レーニンの綱領は、大要、(1) 資本主義の批判 (2) 階級闘争の発展、ブルの措定と任務（共産主義建設）そのためには政治権力の奪取、ブル独創立の必要性、党の任務、党の国際的任務 (3) ロシア資本主義の特徴づけと当面の任務、(4) (1) 一般民主主義的要求 (口) 労働者階級の要求 (ハ) 農業綱領型国家を明示し、(口) に銀行、シンジケートの国有化等、過渡の方策とよばれるものを取り入れた事である。我々の綱領では(2) は(2) の後半に帝国主義の特徴づけて第2インター（日和見主義）批判を入れた事 (4) (1) の中で国家制度としてのソヴェトとして設定される。

(B) 最大限の綱領－最小限の綱領、過渡的綱領  
我々は民主主義、社会主義革命論や、人民民主主義革命論への屈服が実は從来の新左翼運動の革命論の克服を意図しつつ、結局足をすくわれたものであると見てきたが、そのためには從来の革命論をどう克服するかを明らかにしなければならない。

従来の考え方を端的に表現しているのは、トロッキーの「過渡的綱領」である。これは第2インターの最大限—最小限綱領の

(E.T.C.)がかかけられたものであり、一般的なプロの要求を列べた無規準のものではないのである。

所、この最大限—最小限のかけはしを「死の苦斗」という客観情勢に求めるものであり、客観主義であり、プロレタリア人民をどのようにきたえ、組織するものかといふ「主体的」に問題は提起されない。我々は、この種の問題についてはレーニント同様に革命情勢の中で過渡の方策として提起すべき問題であると考える。新左翼運動がこの過渡的綱領を必ずしもそのままとり入れたわけではないが実践的（物の考え方）にそつだつたのであり、それはスターリン主義（スタ・ブハ綱領）による二段階

戦略への批判（理論的のみならず実践上の）と密接不可分のものである。それは左翼的に見えて、実は、政策阻止闘争に階級闘争をおしとどめるものであり、権力奪取の理論ではない。我々の綱領は最大限綱領、最小限綱領でなければならない。レーニンが最大一最小に分けたのはロシア革命がツアーリ打倒の民主主義革命であったからだというのも正しくない。レーニンは

ドイツのよくなプロ革が直接日程にのほつてゐる国でも最大！最小としたのでありロシアではそれが最小限綱領・民主主義革命の内容となつたまでの事である。最小限綱領とはブルジョア社会でのプロレタリア人民の利益を表現し、それ自体としては論理的には資本主義社会で実現可能な要求であるが、それも階級闘

二争を発展させ、從つてプロの段階でも引きつかれる要求の方である。例えは、レーニンのツアーリ打倒は政治的自由を獲得し、その事によつて階級闘争の自由な發展をもたらすものとし、あり、労働者の要求（八時間労働）はプロのマメン、ハイ、消耗を防ぎプロの階級闘争発展の条件を拡大するとともに要求の規準がおかれ、農業綱領も農業での階級闘争の發展がプロにとって一番有利になるようといふ観点から土地国有化

金道  
收書

定期購読申込書

金第氏名

田舎で販賣を始めた。母までの代は、母から娘へと傳承されました。

TEL ( ) 団体  
勤務先もしくは学校  
第 号 から  
第 号 まで  
代金 円を添えて  
申し込みます。

責任者  
編集局  
共同(全國委)

總責任

回分 = 1500E  
回分 = 11000E

全ての支持者諸君、労働者に断固とした船力をお頼  
尚、「烽火」は基本的に予定です。（海号四一〇）

# 共産主義者同盟(全国委員会)

# 「烽火」定期購読のお勧め

共產同(全國委)機關紙

プロは直接的な資本家との闘争（経済闘争）によつては解放はあり得ず、ブルは国家権力を掌握しているからであり、プロはこの政治闘争に於いては人民をひきい、その指導者（ヘゲモーン）となねばならないし、またなり得る唯一の階級である。そして、この闘争はそれ自体として社会主義を実現するものではなく（一般）資本主義社会の闘争はストレートに社会主義を要求する闘争などあり得ない事は自明である）民主主義闘争以外のものではない。このような意味に於いて、革命を民主主義・社会主義とよぶのはそれ自体あやまりとは云えないが社会主義といふ場合、マルクス・レーニン主義ではそのようなものとしてあるのであるから、こと更に云うのはむしろ二段階戦略との区別をあいまいにするものである。

なお先に述べてきた事から明らかな如く最小限綱領は下か（即ち統一戦線の側から）見た時それは統一戦線の綱領＝統戦線の発展としての臨時革命政府の政府綱領のことである。

後注：以上は、綱領問題を取り上げるための若干の前提的問題を取り上げたにすぎず、いまだ、ほとんど、綱領の内容自体に入っていない。以降の号をおいて、明らかにする予定である。